



【実践編④】

子供と教師がともに追究する「主体的・対話的で深い学び」

～「単元マップ」と「豊富な手立て」で誰一人取り残さず学習のゴールへと導く！

加賀市立山代中学校の挑戦～

石川県加賀市は、令和5年1月に令和7年度までの学校教育の方向性を示す「加賀市学校教育ビジョン」を発表し、“BE THE PLAYER”をスローガンに掲げて市内小中学校全校で教育改革を始めました。「自分で考え 動く 生み出す そして社会を変える」人材の育成に向け、「そろえる」教育から「伸ばす」教育への転換を図っています。

(加賀市学校教育ビジョン概要版)

<https://www.city.kaga.ishikawa.jp/material/files/group/20/visiongaiyou113.pdf>

山代中学校では、『「主体的・対話的で深い学び」を追究する生徒の育成』を研究主題とし、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を目指した授業づくりに取り組んでいます。本記事では、3つの授業を取り上げ、明確な単元計画と豊富な手立ての助けを借りながら、子供自身が「主体的・対話的で深い学び」を追究する授業の実現を目指す山代中学校の挑戦に迫ります。

1. 取組のポイントと経緯～「主体的・対話的で深い学び」を追究する！～

山代中学校の研究主題は『「主体的・対話的で深い学び」を追究する生徒の育成』。ここでいう「追究する」の主語は言うまでもなく「生徒」です。学習への困難さを抱える子供も多い中で、一人一人に資質・能力を確実に育成していくためには、生徒自身の主体性の質の高まりや、他者との対話での学びの深まりを目指す授業設計が必要という思いでこの研究主題を設定したそうです。まさに一人一人の子供が「主体的・対話的で深い学び」を追究する姿を一層目指すべく、令和6年度は「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に重点を置いて授業づくりに取り組んでいます。

(1) 子供と向き合い、授業を問い直す

山代中学校では、学習に前向きに取り組むことのできない子供や、学習への困難さを抱える子供への

対応に悩む時期がありました。こうした子供たちにじっくりと向き合い、子供たちの多様性を受けとめるうちに、「もっと子供たち一人一人に目を向けた教育活動が必要ではないか」「子供たちに、自ら学ぶ力、人と適切にかかわりながら学ぶ力を育てたい」という意識が高まっていったといいます。

そうした中、加賀市の“BE THE PLAYER”のビジョンのもと、子供たちが主役となる授業づくりに取り組んで来た同一学区の小学校の実践を見に行くことになり、そこで、近い将来自校に進学してくることとなる子供たちの姿を見たことが大きな転機となりました。子供たちが自ら主体的に学び、自由な発想や個性的な発言が豊かに生かされる小学校の授業の在り方に山代中学校の先生方は大いに刺激を受け、「教師が教える授業」から「子供が自分たちで学び取る授業」へと転換を目指すきっかけとなりました。

こうした学校としての子供観や授業観の進化が、現在の山代中学校の授業づくりの根底にあります。

（２）「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりのポイント

このような経緯で始まった２年間の研究を経て、現在の山代中学校では、どの教科でも以下のポイントに基づく授業づくりを行っています。

○学校教育目標を単元までつなぐ「カリキュラム・マネジメント」

まず学校教育目標と学習指導要領を踏まえて育てたい子供の姿を具体化した「全体計画」を描きます。その上で、そうした姿を実現するため、各学年の年間指導計画を統合した「単元配列表」を描き、最後に個々の単元を構想していきます。これらの情報は常に Google スプレッドシートで共有され、教員誰もがいつどの教科でどのような学習を行うかをいつでも見ることができ、目指す方向が共通理解されます。

○単元を意識した授業構想

単元を通して各教科等の資質・能力の育成を図る、深まりのある授業構想を目指します。その過程では、学習指導要領と教材を照らし合わせながら育成したい資質・能力を定め、それに向けて子供が主体的・対話的に学ぶことができるよう、どの場面で、何を、どのように子供に委ねるかを吟味します。「何を」に当たる要素には、課題、対象、時間、進度、相手、方法、難易度などがあります。また、単元の中で、子供が「個別」「協働」「教師主導」で学ぶ場面を意図的に設定します。

○「単元マップ」の作成と共有

「単元名、単元の目標、単元の流れ、時数、手立て、評価」を一覧で示した「単元マップ」を作成します。子供が見通しをもって主体的に学習に取り組むことができるよう、単元のはじめに生徒と共有します。

○学習内容と生徒の実態に応じた「手立て」（足場かけ）の工夫

子供が学習に必要な情報に必要なタイミングでアクセスできる環境を整えます。その際、ICT を活用するデジタル学習環境と、実物を用いるリアルな学習環境のどちらも重要ととらえ、学習の足場かけを行います。

（３）学び手である子供と「目指す学び」を共有

山代中学校では、目指す授業や学びの在り方について全校生徒と共有を図る学習集会を開催しています。集会では、社会の急激な変化について言及し、子供たちがこれからの社会を生き抜くために必要な資質・能力を身に付けていくために、「主体的・対話的で深い学び」を目指していくこと、そのために「単元マップ」の作成など、学校全体で授業の転換を図っていくことを伝えます。「主体的・対話的で深い学び」については、学習指導要領を基にそれらが具体的に「どのような学び」なのかを分かりやすく語り、子供たち自身にも実現を求めるとともに、教師もそのような学びが実現する授業づくりに取り組んでいくことを宣言したのです。



各教室に掲示している「目指す学び」（「主体的・対話的で深い学び」の具体）

2. 単元づくりのポイント～「単元マップ」を通じて目指す学びを共有～

次に、山代中学校の単元づくりにおけるポイントを5つに分けて詳しく見ていきましょう。

- ① 学習指導要領を読んだり、教材研究を通じて教材の持つ特性や価値を把握したりしながら、全ての
子供に育みたい資質・能力やその評価規準を明確にする。
- ② 育みたい資質・能力を発揮している子供の姿を明確にした上で、多様な子供たちが主体的に学べるよ
うな単元を通して取り組む学習課題やパフォーマンス課題を設定し、学習の流れを作っていく（思考・
判断・表現しながら知識・技能が身に付くような流れを意識する。）
- ③ 子供の思考の流れやつまづく可能性のある事柄を予想し、必要な「手立て」（足場かけ）を用意す
る。個々の生徒が自力で目標達成に向かうことができるよう、ヒントや様々な資料を準備する。また、よ
り学びが深まるよう、「個別」「協働」「教師主導」といった学習形態を意図的に設定する。
- ④ 子供が自律的に学習を進められるように、単元のはじめに端末を通じて「単元マップ」を共有し、学習
計画の見通しをもたせる。
- ⑤ 「知識・技能」は単元テストやワークシートで評価を行う一方、「思考・判断・表現」や「主体的に学習
に取り組む態度」はパフォーマンス課題を中心として評価を行うなど、評価場面を精選しつつ、分かりや
すく整理する。振り返りを丁寧に書かせるが、評定のための評価ではなく、子供が学びを自己調整し、
深めていくための材料として用いる。

次に、このような単元づくりのポイントに基づく授業づくりの具体的な姿を見ていきましょう。取材した授業
は、1年生国語、1年生理科、3年生英語の単元導入1時間目の授業です。

（1）1学年国語「人物を通して魅力を語ろう（「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から）」 （岡田教諭）

この単元の目標は、「場面と場面、場面と描写などを結びつけて、内容を解釈する」ことです。岡田教諭
は、中学校で最初の古典の学習に当たり、古典の世界に親しむために『竹取物語』に登場する人物に焦
点を当て、どの人物のどのような心情や行動に共感できるかを語り合う学習を構想しました。教科書や図書

教材などの複数の資料から得られる情報を基に、登場人物が物語の中でどのように描かれているかを解釈する子供の姿を期待しました。

（1 学年国語（岡田教諭）学習指導案）

（2）1 学年理科「音による現象」（河崎教諭）

この単元の目標は、「音についての観察・実験を通して、音は物体の振動によって生じ、その振動が空気中などを伝わること、音の大小や高低は発音体の振動の振幅と振動数に関係することを見出し理解すること」です。河崎教諭は、身近な音に関わる数多くの現象の実験・観察を通して、「音が鳴る現象の原理」「音階が変わる原理」について考えさせる学習を構想しました。現象に対する仮説を立てながら目的をもって実験・観察に取り組む子供の姿を期待しました。

（1 学年理科（河崎教諭）学習指導案）

（3）3 学年英語「Unit6 Beyond Borders（New Horizon3）」（静岡教諭）

この単元で扱う領域目標は、「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする」（「書くこと」ウ）ことです。静岡教諭は、3 年生最後のユニットとして国際協力、相互協力、相互援助をテーマに扱い、国際社会に対する願いや自分たちが貢献できることについて書く活動を構想しました。仮定法や関係代名詞といった言語材料を用いて自分の考えを英語で発信する子供の姿を期待しました。

（3 学年英語（静岡教諭）学習指導案）

3. 実際の授業のワンシーン～単元のゴールに向けて動き出す子供～

（1）1 学年国語「人物を通して魅力を語ろう（『蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から』）」（岡田教諭）

子供たちは事前に絵本の「かぐや姫」を読んでこの単元の学習に臨んでいます。岡田教諭は絵本と古文との内容の違いについて問いかけたり、竹取物語のクイズを出したりしながら、少しずつ子供たちの関心を高めていきました。子供たちからは、「古典はつまらない」などの声も出てきます。そこで、岡田先生は、同じ単元を学んだ先輩たち（昨年度の1 年生）の振り返りの記述を紹介します。振り返りは、「1000 年前にこんなに面白い話があったなんて信じられない」「登場人物一人一人に個性があって面白い」「特に〇〇がすごく壮大な話を考えていて共感できた」といった内容です。「つまなさそう」という率直な思いと、先輩達の振り返りのギャップに子供たちの興味・関心が出てきたところで、「『竹取物語』に登場する人物の心情や行動から共感できる点を探り、語り合おう」という、単元を通して取り組む課題を設定しました。ここで、子供たちは「単元マップ」に活動内容等を記述するとともに、単元の目標や流れを確認しました。



先輩の振り返りを提示する岡田教諭

その後、子供たちに物語中の「富士の煙」の一節を音読させ、富士山の頂で手紙と不死の薬の壺を燃やした帝に共感できる点を考えさせました。

「かぐや姫に会いたくて、少しでも近いところで富士山の頂上にしたのではないか」

「不死の薬を飲まずに、いずれ、かぐや姫のいる天に行こうとしたのではないか」

帝のかぐや姫に対する深い想いに気付き、「恋愛ものだと思えば共感できる部分がある」と、古文をぐっと身近に感じた子供たちの話合いは徐々に活気づいていきました。



「竹取物語」の一場面について話し合う子供たち

「つまらなさそうだったけど、こんなちょっとした部分で共感できる場所があったのだから、自分が共感できることが探せそうだ」。授業の最後には、多くの子供から今後の学習に対する期待感が聞かれました。この単元の導入があるからこそ、次時以降の子供たちの主体的な学びが期待でき、単元を通じた学びへの見通しと期待感を持たせること自体が、大きな「足場かけ」となっていました。次時から、物語に登場する様々な人物から自分が着目する人物を選択し、その人物に着目して場面と場面、場面と描写などを結び付けながら心情や行動を解釈していきます。

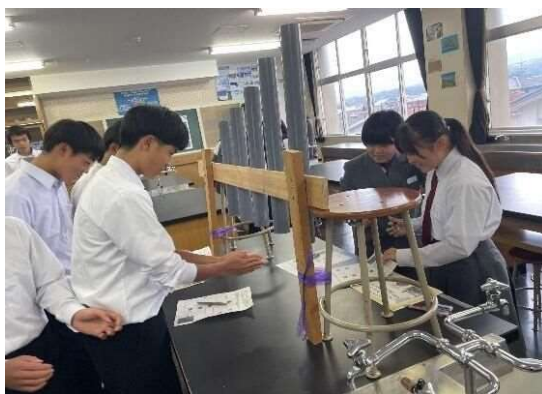
（２）１学年理科「音による現象」（河崎教諭）

音の学習は小学校３年生以来です。河崎教諭は実際にトライアングルや鉄琴、おりんなどを叩いて音当てクイズをしながら、物体が振動して音が出ることを確認し、小学校で糸電話の実験活動を行ったことも思い出させます。そして、音に関する新たな疑問を見付けることが本時の課題であることを伝えた上で、みんなで出し合った疑問を基に単元の課題をつくっていこうと語りかけました。

子供たちが新たな疑問を見付けるための体験コーナーは７つ。２つの理科室を使って、グラスハーブ、試験管笛、ティンパニ、マジックパイプ、ギター、チューブ電話、パラボラ傘の実験装置が用意されていました。それぞれの実験装置の使い方について資料と動画で簡単にまとめてあり、子供たちはそれらを見ながら実験を進めていきます。これらの資料が足場かけとなり、子供が安心して実験に取り組んでいました。

子供たちは７つの体験コーナーを思い思いに回り、友達と一緒に実験装置の音を出しながら音の出方やその仕組みについて話し合いました。じっくりと一つの実験装置を使って考える子供、多くの実験装置から疑問を見いだそうとする子供。学習のペースや取り組み方は様々です。



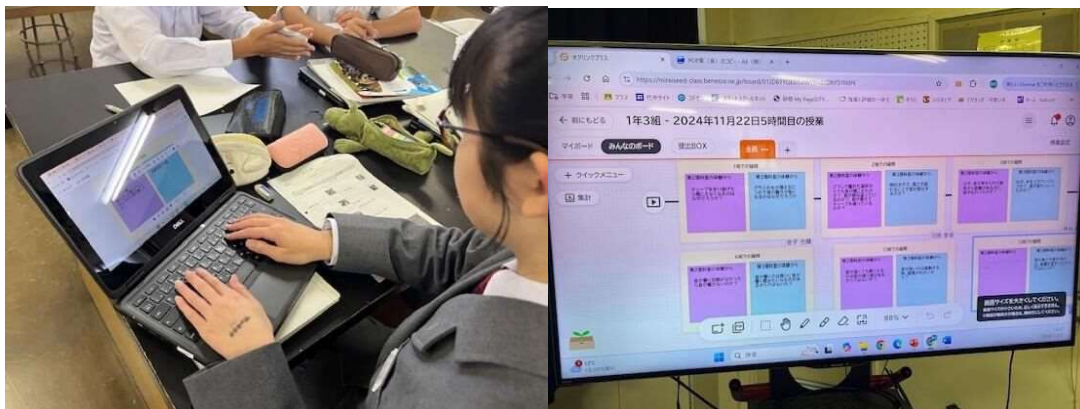


様々な実験装置で実験を繰り返す子供たち



実験装置の使い方を記した資料

その後、子供たちは実験から見いだした疑問をシートにまとめ、グループで共有しました。河崎教諭はここで、グループ内で出された複数の疑問から、これからの学習で追究すべき内容を考えるように促します。子供たちはグループでの議論を通して、音の高低に関する疑問、音の伝わり方に関する内容に整理していきました。

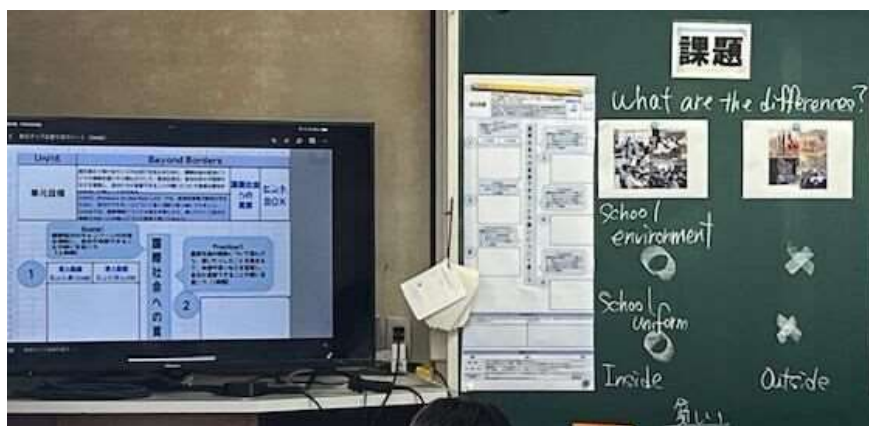


端末を活用して実験から見いだした疑問をシートに整理する子供

さらに、グループでの話合いの内容を学級全体で共有し、単元を貫く問いとして「音の高低は、何によって決まるのか」「音は何を伝わって聞こえているのか」の2点を設定しました。そして、「単元マップ」を通して、単元の学習計画を確認しました。次時以降、子供たちはこれらの課題を解決するために複数の実験・観察を行います。

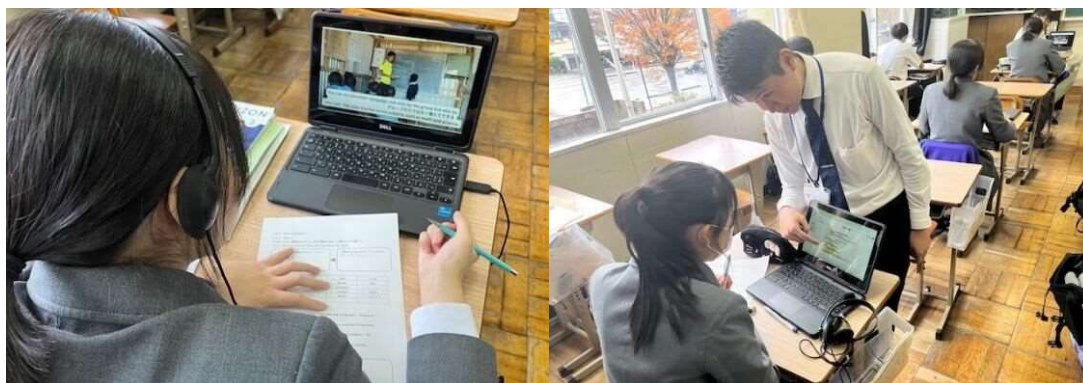
(3) 3 学年英語「Unit6 Beyond Borders (New Horizon3)」(静岡教諭)

静岡教諭は、はじめに子供たちに発展途上国の子供たちの学校生活に関する写真を提示し、日本の学校生活との違いに気付かせます。恵まれない環境に置かれた子供たちの生活に触れさせ、単元のテーマである国際協力に子供たちの意識を向けさせます。そして、「国際社会において自分たちが貢献できることや国際社会に対する願いについて英文を書こう」という言語活動を設定します。このタイミングで「単元マップ」を示し、子供たちに単元の目標や評価について共有していました。



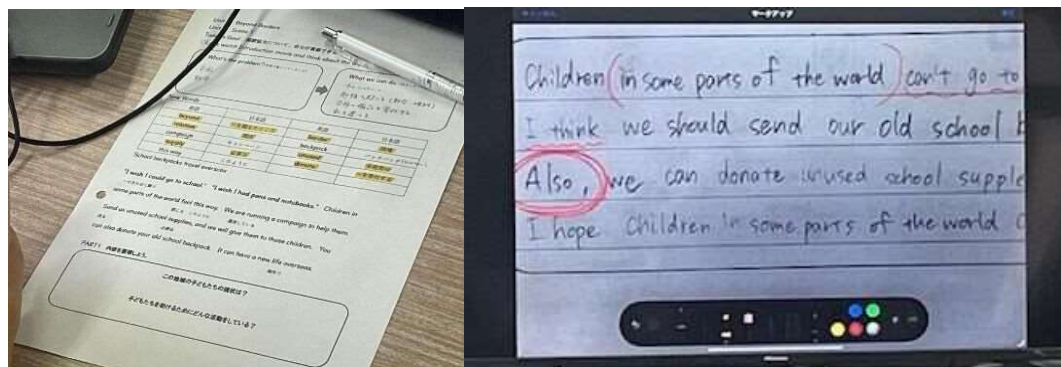
ディスプレイ画面に映された「単元マップ」

続いて、静岡教諭は子供たちに国際協力のキャンペーン広告動画を提示しました。動画は2種類（英語字幕あり／なし）が用意され、子供が自分で選択して視聴できるようになっていました。子供は視聴した動画を基に、アフガニスタンの子供たちの現状や行われている支援について整理しました。



動画を視聴する子供

動画の内容について学級全体で確認し、英語でやり取りをした後、子供は自分の考えを英語で書く活動に取り組みました。この活動では、レベル分けされた2種類のプリントから選んで取り組めるようになっており、全員が「この地域の子供たちに貢献できることや現状に対する願い」を英語で書くとともに、チャレンジできる子供には、「アフガニスタンの子供たちの現状」を英語で書くことも促していました。子供がつまづきそうなポイントにはあらかじめ「単元マップ」の「ヒント BOX」にヒントが用意されているので、子供たちは必要に応じていつでも見ることができました。このように、多様な手立て（足場かけ）を用意することで、全ての子供が本時の目標を達成することができるよう配慮されています。



子供のワークシートの記述

次時は、仮定法（wish）を用いて、この時間に書いた英文に自分の願いを加えて伝える活動を行います。その後も新出の言語材料を効果的に使いながら、国際社会の現状やそれに対する自分の願いを伝える活動を続け、単元終末では蓄積した英文を基に書きまとめます。

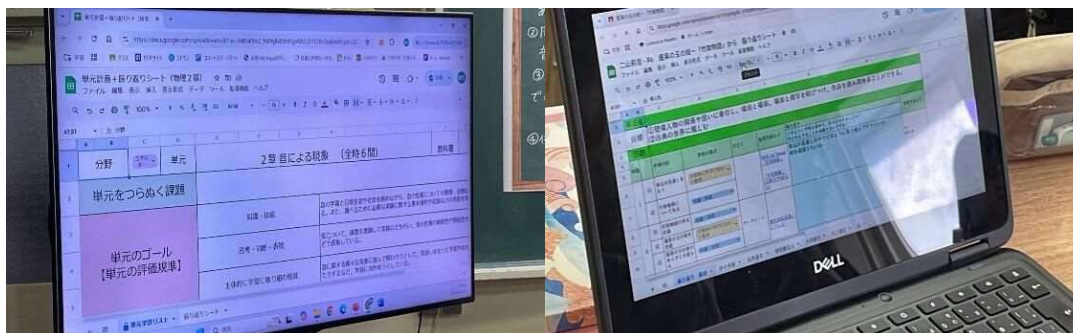
※授業ハイライト動画（「note」に掲載）

4. ～授業づくりのポイント～岡田教諭・河崎教諭・静岡教諭インタビューより～

（１）「単元マップ」の効果を最大化するための導入 1 時間目

教科の異なる3つの授業はいずれも単元導入の1時間目でした。共通するのは、単元の終末にそれぞれの学習内容をまとめたり交流したりするパフォーマンス課題を設定していること。このパフォーマンス課題に対する子供の記述や発話等を単元における主な評価材料とし、評価場面を精選していること。そして、パフォーマンス課題にしっかりと取り組めるようにするために、子供たちの学習に対する興味・関心を高め、動機付けを十分に行っていることです。国語の授業では、「竹取物語」に親しみをもたせるためにクイズを取り入れ、さらに先輩の振り返り記述を紹介して物語の魅力を探るきっかけにしていました。その後、「竹取物語」の一節における帝の思いに着目して共感できる点を考えるという学習課題は、パフォーマンス課題のミニバージョンとも言えるものでした。理科の授業では、小学校での学習を想起させた上で、身近な楽器や魅力的な装置を7種類用意し、実験から見いだした新たな疑問を整理する形で単元課題の設定を行っていました。英語の授業では、国際社会に関心を持たせる入り口として、提示した写真から発展途上国と自分たちの学校での様子の違いに気付かせ、なぜこのような状況が生まれているのかを考えさせていました。

このように、魅力的な教材の提示や学習内容と社会とのつながりを意識した教師の働き掛けによって子供の学習への動機付けを行った上で、クラウドに保存した「単元マップ」を子供と共有しています。「単元マップ」は教科によって若干の違いがありますが、「単元名、単元の目標、単元の流れ、時数、手立て、評価」などが掲載され、子供が見通しをもって自律的に学習を進める支えとなっています。静岡教諭は「単元マップ」について、「子供からのフィードバックをもらいながら、より構造的に進化させていきたい」と語ります。実際、振り返りシートを「単元マップ」内に一体化させたのは子供の声があったからだといいます。「主体的・対話的で深い学び」を追究する子供とともに、よりよい「単元マップ」へと現在進行形でブラッシュアップを図っています。



子供の声を取り入れながら進化する「単元マップ」

（２）多様な学習状況にある子供を支える手立て（足場かけ）

3つの授業では、子供の学習を支える手立て（足場かけ）も大切にされていました。国語の授業では、事前に絵本の「かぐや姫」を読む機会を設けたり、古文の読みに慣れていない子供のために、対応する絵本をモニターに写して範読したりしていました。「単元マップ」には学習に関連する多くの参考文献のリンクが用意されていました。理科の授業では、実際に音を試すことのできる7種類の実験装置が用意され、子供たちは自由に試すことができるようになっていました。河崎教諭は理科の学習において、リアルに体験できる場を多様に提供することが重要と考えています。また、それぞれの体験コーナーには、実験のポイントが簡潔にまとめられた表示があり、さらに二次元コードを読み取れば実験の仕方について解説した自作動画が見られるようになっていました。まさに、デジタルの力でリアルな学びを支えているのです。英語の授業では、視聴する動画について「英語字幕あり／なし」、ワークシートの「ヒントあり／なし」といったように、2種類から選択できるようになっていました。また、「単元マップ」の中には「ヒント BOX」があり、つまずきやすい文法やまとりに必要な表現等を子供がいつでも確認できるようになっていました。この他にも、各教科ともに「単元マップ」において、子供たちが自律的に学びを進める際に必要な情報が整理されており、いつでもアクセスできるようになっていました。

こうしたきめ細やかな手立て（足場かけ）の数々は、子供の多様な実態に応じ、どの子も置き去りにしないための重要な働きをしています。それとともに、子供たちは自分に合った学習ルートを選びながら、必要なタイミングで必要な学習材を選び、活用できることとなります。選択肢は単なる学習支援にとどまらず、子供たちの意欲や学びの当事者としての意識を高め、より自律した学び手への成長を促す仕掛けにもなっているのです。

5. 学校全体で取り組むポイント～谷鋪校長インタビューより～

山代中学校における学校全体での授業づくりの取組は、教職員の熱意や力量を結集した組織体制が支えています。山代中学校では、授業づくりの取組を研究主任等の一部の教師に頼るのではなく、「研究部」「教務部」「生徒指導部」の3部が授業を軸として連携する体制を整えています。

- ・授業の在り方についての研究推進を担う「研究部」
- ・授業づくりを支えるカリキュラム・マネジメントの推進を担う「教務部」
- ・学びの土台としての学級経営や集団づくりの推進を担う「生徒指導部」

これは、谷鋪校長自身がかつて研究主任や教務主任を務めた経験から生まれた「一人ではできない。協力体制が不可欠」という考えに基づくものです。各部の役割を明確にしつつ連携を図る仕組みを整えたことで、担当する教員が変わっても支障なく取組を継続できるようになっています。まさに、持続可能な組織体制をシステム化しているのです。

また、これらの各部がそれぞれの創意工夫を生かして取組を改善していくことが重要と語ります。校長は「こんなことができるいいね」といったように方向性だけを示し、あとは各部が取組を具体化することで、授業づくりの取組をアップデートしています。教職員集団が豊かに関わりながら協力・連携を深める組織力が基盤となって、子供たちが豊かに関わりながら一人一人が学びを深める「学校でしかできない学び」を大切にしているのです。

6. 終わりに

山代中学校では、目の前の子供一人一人と向き合い、全ての子供に「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、「単元マップ」ときめ細かな手立て（足場かけ）を核とした授業づくりに取り組んでいました。授業づくりに向けた校内の組織体制を整えたことも大きな特徴と言えるでしょう。山代中学校には、加賀市の“BE THE PLAYER”のスローガンの下、子供も教師も当事者としてよりよい学びを追究する姿がありました。

本記事が、全校の多くの先生方にとって、「主体的・対話的で深い学び」を全ての子供に、これまで以上に確かに実現する授業へと改善していくヒントになってほしいと願っています。

（第3回教育課程企画特別部会での発表資料）

https://www.mext.go.jp/content/20250228-mext_kyoiku01-000040050_05.pdf

実践編⑤

「ラーニングガイド」×GIGA×教師の支援で
学びの質を高める！
吉田町立吉田中学校の挑戦

1人1台端末の活用を軸にした 「生徒が主体的に学ぶ授業」

【実践編⑤】

1人1台端末の活用を軸にした「生徒が主体的に学ぶ授業」

～「ラーニングガイド」×GIGA×教師の支援で学びの質を高める！

吉田町立吉田中学校の挑戦～

静岡県吉田町（町立小学校3校、中学校1校）は、1人1台端末とクラウド環境を最大限活用する教育DXにより、町ぐるみの授業改善を推進しています。

吉田中学校では、令和元年度から「生徒が主体的に学ぶ授業」を研修テーマに掲げ、一貫して「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指してきました。また、文部科学省のリーディングDXスクールの指定を受けたことを契機に「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図っています。

本記事では、令和5年度まで研修主任を務め、自らも授業者として子供主体の授業への転換に取り組む山岸教諭の実践にフォーカスし、「子供が自分の学びをつくる」授業づくりへの挑戦に迫ります。

1. 取組のポイントと経緯～「子供が自分の学びをつくる」授業へ～

山岸教諭は、単年で育成したい資質・能力を発揮し、学びを深めるためのパフォーマンス課題を設定するとともに、その課題に向けて子供たちが自ら仮説や学習計画を立てながら主体的に学習を進める単元づくりに取り組んでいます。学びの過程では、子供が社会的な見方・考え方を働かせることができるような支援を積極的に行いつつ、端末を有効に活用して子供たちが自分の学びをつくれるよう工夫を凝らしています。

こうした授業づくりに至るまでには、中学校社会科の教師として真摯に授業づくりに取り組んできた経験の中で、次のようなターニングポイントがありました。

（1）経緯① コロナ禍で見つめ直した学び

採用以来、子供の主体的な学びを大切にしてきた山岸教諭。自らの授業を見つめ直し、さらに発展させるきっかけになったのが、コロナ禍でした。様々な制約に苦しみながら子供たちの学びを止めないように教師たちが奮闘する中で、山岸教諭は自らに問い掛けることになります。

「子供たちが主体的に学ぶとはどのようなことなのか？」

「子供たちにとって本当に必要な学びとは何か？」

そして、「社会が急速に変化の中で、子供たちが自ら考えて学習を進め、学んだ内容やプロセスに対して納得感を積み重ねていくことこそ、子供たちが社会の中で自己実現していくために重要なのではないか」と考えるようになりました。

（２）経緯② 町ぐるみの GIGA の動き

GIGA スクール構想のもと、吉田町では町全教職員研修会が始まりました。「教育の情報化」を核として「主体的に学び続ける力を育成する」という方向性を共有し、授業改善について学び合う場です。このような町ぐるみの取組が、吉田中学校の授業改善を大きく加速させたと言います。端末を使えば、子供たちは自分の興味・関心に応じて多様な情報にアクセスでき、また調べたことや考えたことを自分に合った方法で記録することもできます。さらには、クラウド環境を活用すれば記録したことを瞬時にクラスメートと共有することもできます。こうした学習環境により、間違いなく子供たちの学びの幅が広がったと言います。



端末とクラウド環境を活用して学習する子供

このような学習環境の変化に伴い、「子供たちが自ら考えて学習を進め、学ぶ内容や学んだプロセスに対して納得感を積み重ねていく」授業に向けて、山岸教諭のイメージも明確になっていきます。それは、端末を有効に使いながら「子供が自分の学びをつくる」という授業像でした。

２．単元づくりのポイント～「子供が自分の学びをつくる」ための学びのデザイン～

山岸教諭の単元づくりでは、主に以下のポイントが意識されていました。

- ① 学習指導要領を基に、全ての子供に育みたい資質・能力やその評価規準を定める
- ② 子供たちが学びの成果を発揮し、資質・能力を育成・評価するために適切なパフォーマンス課題（「学びの舞台」）を設定する
- ③ 全ての子供が資質・能力を身に付けながらパフォーマンス課題（「学びの舞台」）に向かうことができるよう、取組の中間評価とそれに基づく指導・支援を行うためのチェックポイントとなる活動を設定する
- ④ 前時の補足資料や参考資料など、子供が学習を進めるに当たって必要となる資料を準備する
- ⑤ 子供が自己調整を図りながら主体的に学習に取り組むことができるよう、単元のはじめに単元の学習を見通す「ラーニングガイド」を子供に共有する

取材したのは、2年生の社会科「日本の諸地域 中部地方」の単元の授業です。この単元の学習内容について、学習指導要領では次のように示されています。

(3) 日本の諸地域

次の①から⑤までの考察の仕方を基にして、空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。

- ① 自然環境を中核とした考察の仕方
- ② 人口や都市・村落を中核とした考察の仕方
- ③ 産業を中核とした考察の仕方
- ④ 交通や通信を中核とした考察の仕方
- ⑤ その他の事象を中核とした考察の仕方

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 幾つかに区分した日本のそれぞれの地域について、その地域的特色や地域の課題を理解すること。

(イ) ①から⑤までの考察の仕方を取り上げた特色ある事象と、それに 関連する他の事象や、そこで生ずる課題を理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 日本の諸地域において、それぞれ①から⑤までで扱う中核となる事象の成立条件を、地域の広がりや地域内の結び付き、人々の対応などに着目して、他の事象やそこで生ずる課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し、表現すること。

この学習内容に対応した単元を実施するに当たり、山岸教諭は、「日本の諸地域」における九州、中国・四国、近畿地方などの他の地方に関するそれまでの学習を生かして、社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせて自分たちの住む中部地方について主体的に学んでほしいと考えました。中部地方は、その特色から、学習指導要領で示された「③ 産業を中核とした考察の仕方」が中心となりますが、他の地方についての学習を基に①から④までの考察との関連を図るとともに、「日本の諸地域」の学習全体を通じて①から⑤までの考察の仕方が身に付くよう指導する構想を立てていました。その上で、本単元は以下のように構想しました。

- ・単元名：日本の諸地域 中部地方
- ・単元のゴール：中部地方についてのパネルディスカッション（「学びの舞台」）
- ・指導計画：「課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ」の過程（全6時間）
 - 4時間目に中間報告会（「学びのチェックポイント」）
 - 6時間目にパネルディスカッション（「学びの舞台」）

3. 実際の授業のワンシーン～「自分の学び」を進める子供たち～

取材した授業は6時間扱いの単元「中部地方」の2時間目。吉田町がある静岡県は中部地方に属します。前時の単元導入1時間目では、中部地方について知っていることを出し合い、学級全体で共有しました。中部地方は東海地域、中央高地、北陸地域の三つの地域を含む広い地方です。子供たちからは意外にも日本海側の北陸地域に関する情報が多く出され、中央高地、静岡県が位置する東海地域に関する既存の知識は少ない状況でした。子供たちは、自分たちが住む静岡県が属する中部地方について詳しく知ろうという意識を高めていました。

授業の冒頭、テレビ画面に「ラーニングガイド」に収められた単元計画と前回の振り返りが映し出され、生徒の手元の端末にも同じ情報が表示されています。

単元課題	
私達の住む「中部地方」とは、どのような地方なのだろう ～今までの社会科の学習を生かして、自分たちで授業を作ろう～ 教科書範囲P219～234	
<単元について> (全6時間)	
①単元課題を解決するために、「仮説」と「何をどのように進めていくのかを計画」し、先生の図を受ける。	【課題設定】 (主体)
②教科書、資料から課題解決に必要な情報を集める。	【情報収集】 (技能)
③集めた情報を表や思考ツールを使って整理し、見方・考え方を意識して、情報を分析する。	【整理・分析】 (思考・判断)
④4時間目に中間報告会を開催し、進捗状況を確認し合う。	【まとめ】 (表現)
⑤【学びの舞台】 6時間目に探究した内容をパネルディスカッション形式で議論する。	【まとめ】 (表現)
※協働したいと思ってもらえる人になる。また、自分で判断し、自分から声をかける練習！	
※教室は8つの島を作っておき、協働しやすいようにする。	
※毎回「振り返り」で学習した内容をリトリブする。	(知識、主体)

子供に共有された「ラーニングガイド」内の単元計画

山岸教諭が、「中部地方はどのような地方なのだろう」という単元課題と、「単元課題に向けて、自分で仮説を立ててそれについて調べ・考え・議論する」という形で学習を進めることを再確認すると、子供たちは躊躇なくそれぞれの学びに移っていきます。

「中部地方は土地が広くて気候が多様なはずだから、気候に合ったいろいろな農業や工業ができるだろう。」「東海地域は海に面していることを利用して工業が盛んなのではないかな。北陸や中央高地は山地が多く雪が降るので、それを利用した産業を行っているのではないかな。」というように、前時のうちに三分の二ほどの子供が中部地方の特色について仮説を立てている状況でした。日本の他の地方に関するこれまでの学習が生かされ、自然環境と産業などを結び付けた多くの仮説が、全員に共有している一覧シートに並びます。前時から引き続いて仮説を考えていた子供は、自分の仮説を立て終わると山岸教諭のチェックを受けていました。



テレビ画面に映し出された子供たちの仮説

仮説を立て終わると、次は学習計画を考える活動です。子供たちはそれぞれの仮説を追究するために、まずは4時間目に設定された中間報告会に向けての計画を立てました。活動内容、調べ方や用いる思考ツール、協働相手（誰といつ協働するか）を観点に、自分なりにその時点で適切だと考える学習の進め方についてシートに記入していきます。学習計画について悩む子供に対して、山岸教諭は丁寧に話を聞きながら、これまでの学習経験を想起させたり、他の子供の学習状況を提供したりしてアドバイスしていました。



一人一人が自分の学習計画を作成

学習計画の作成後、子供たちはそれぞれの仮説の検証のための追究に移ります。子供たちは教科書をじっくりと読み込みながら、自分の仮説が正しいかどうかを確認めることのできる情報を集め、情報を整理・分析してプレゼンシートにまとめていました。そうした追究の中で、自然と友達同士の対話も生まれます。



自分で立てた仮説を基に追究を進める子供たち

中部地方の自然、中京工業地帯の発展など、仮説の検証に関連して教科書以上の情報が必要になった場合は、子供たちは積極的に端末を使って検索していました。さらには、自席を立ち、同内容の仮説を立てている友達の隣に席を移して一緒に教科書の内容を確認する子供もいました。子供たちは自分で立てた学習計画を基に、アクセスする学習材や協働する相手を自分で決めながら、自分のペースで学習を進めていました。



協働する相手も自分で決めて学ぶ子供



追究したことのまとめ方も子供一人一人が考える

子供たちが追究したことをシートにまとめていた授業の終盤、山岸教諭が子供たち全員に声を掛けます。ある子供のシートをテレビ画面に写し、中部地方の3つの地域について複数の観点ごとに表にまとめる際の留意点を指導し、同じような表にまとめている子供に対しては確認を促しました。



必要に応じて学級全体に指導する山岸教諭

最後に、子供たちはこの時間の学習を振り返り、「単元課題について今日までに解決したこと（学習内容）」「何を使って、どう行動したか（学習方法）」をシートに記述し、授業を終えました。次時にもう1時間、さらなる情報収集や整理・分析、まとめの活動を行い、子供たちは4時間目の中間報告会に臨みます。

※授業ハイライト動画（「note」に掲載）

4. 授業づくりのポイント～山岸教諭インタビューより～

「子供が自分の学びをつくる」授業について、山岸教諭は「子供が学びをカスタマイズするイメージ」と語ります。そのような学びを支えているものは何なのか。山岸教諭の授業とインタビューから紐解きます。

（１）単元で育む資質・能力

吉田中学校の授業で近年最も変わったところが、単元のまとまりで授業を構想するようになったことだと山岸教諭は語ります。山岸教諭の授業も「中部地方」の単元のまとまりで構想され、単元の学習を通じて子供たちに身に付けてほしい資質・能力を明確にした上で、資質・能力を育成・評価するパフォーマンス課題を設定しています。今回は、「中部地方」についてのパネルディスカッションでした。子供たちはそれぞれの仮説に対して追究したことをスライドにまとめて語り合います。パネラー以外の聞き手の子供はチャットで意見を表明し、相互評価の場にします。このような学習のゴールとなるパフォーマンス課題を「学びの舞台」として位置付け、評価の場面としているのです。

加えて、単元の導入で子供たちに観点別の評価規準を示します。また、その中には「地理的な見方・考え方」を働かせるためのヒントも掲載されています。このことにより、子供は、どのようなことができるようになればよいかをはっきりと意識し、自分の学習を計画したり学習の過程で調整したり、学習を振り返ったりすることができるようになります。毎時間の学習の振り返りにおいては、まず子供自身がこの規準から自分の学びを振り返り、その後、教師からのフィードバックを行うことで次時の学習への後押しとなるようにしています。

単元の評価規準（学習のポイント）	
知識・技能	思考・判断・表現
☒ 教科書に載っている文章や資料から単元課題を解決するために必要な情報を読み取ることができる（技能）。 ☒ 収集した情報を適切なツールを使用して整理できる（技能）。 ☒ 解決した学習課題に関する「つまり」は、知識として記憶に定着させ、いつでも取り出すことができる。	☒ 整理した情報を、地理的な「見方・考え方」を生かして、教科書の記述や資料を比較したり、関連付けたりして分析し、「つまり」を書くことができる。 ※地理的な見方・考え方とは ・どこに位置しているのか？ ・どのような場所なのか？ ・まわりの自然環境からどんな影響を受けているのか？ ・まわりの自然環境にどんな影響を与えているのか？ ・その地域の特徴は何か？（他地域と比較する）
主体的に学習に取り組む態度	
☒ 単元の構成を理解し、単元課題を解決するためにどのように学習に取り組むべきか計画を立て、 時間内 に課題解決できるように授業に参加している。 ☒ 「見方・考え方」を意識し、粘り強く単元課題、学習課題に取り組んでいる（社会的な手抜き×）。 ☒ 協働したら「学びが深まる」と考えられるクラスの人と議論し、課題解決に取り組んでいる。	

「ラーニングガイド」で示された評価規準

（２）子供たちの学びを導く「ラーニングガイド」と GIGA

子供が自ら学びをカスタマイズしながら単元全体の学びを進めていくための核になっているのが「ラーニングガイド」（学びの手引き）です。「ラーニングガイド」は単元のはじめに端末を通じて子供に共有することで、子供たちが自分の学びを自立的に進めていく重要な役割を果たしています。「ラーニングガイド」には、基本的に次の情報が一元化され、クラウド上に保存されて全員に共有されています。

- ・単元の目標（子供に身に付けてほしい資質・能力）
- ・パフォーマンス課題（単元のゴール「学びの舞台」）
- ・学習の計画（学習の流れ）
- ・評価規準
- ・参考資料

これらに加えて、山岸教諭の授業では、子供たち一人一人が作成した学習計画のシート、調べたことをまとめたスライドシートも「ラーニングガイド」でリンク共有され、子供たちはこれらをいつでも更新・相互参照できるようにしていました。「ラーニングガイドを見れば、やるべきことがわかる、ヒントがある」という環境を作り出していると言えます。さらに、子供たちが立てた仮説の一覧シートや振り返りシートもクラウド上で共有され、いつでも参照できるようになっていて、協働するための適切な相手を探すのにも役立ちます。山岸教諭は、子供たちが自分の学びをカスタマイズするための選択肢を多く用意することが重要と考えています。そのために、端末とクラウド環境を活用した「ラーニングガイド」の共有は不可欠と言えるほど重要な役割を果たしています。

4 時間目 中間報告会について

＜中間報告会の仕方＞

- ① 自分の進捗状況を説明する
- ② 自分が追究している中で出た疑問点やよくわからない部分を紹介する
- ③ 出てきた疑問は答えられるなら答える。わからない部分は調べる

＜ポイント＞

☑発表者

- ・自分が調べてきたことを、自分の言葉で説明できるようにする
- ・わからない用語は、事前にきちんと調べておく
- ・「つまり」を意識して整理・分析しておく

☑聞く側

- ・自分が調べていなかったり、注目していなかった部分を意識して聞く
- ・質問があれば、どんどん発表者に聞く
- ・自分の仮説が違っていそうだと感じたら、修正をする（なぜ違っていったのかを検証する）

単元計画（全6時間）

時間	内容	調べ方・思考ツール	協働計画（誰と、いつ）
1 2 3	仮説を立て、先生のチェックを受ける		
4	中間発表会		
5			

↓

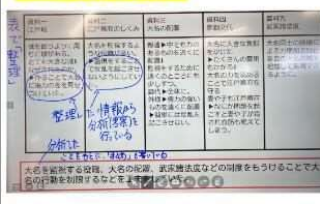
6 パネルディスカッション 私たちの住む「中部地方」とはどういう地域なのだろう

☆動画資料

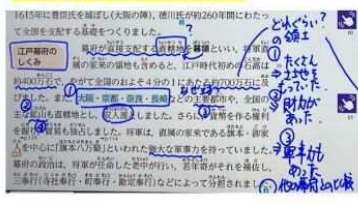
10minBox 地理

☆教科書資料集

☆整理・分析とは？



☆教科書を読解するには？



「ラーニングガイド」に収められた資料

（３）教師の指導性の発揮

単元のまとまりによる授業づくりを基盤とし、「ラーニングガイド」と端末の活用を前提としつつ、山岸教諭は授業中の教師による子供への直接的な働き掛けを重要視しています。授業では教室中を動きながら子供たちの学習状況を見取り、主に次のような目的で積極的に声を掛けていました。

- ・子供のつまづきに対する支援と誤りに対する修正
- ・子供が学習を進める方法や効果的な学習の工夫についてのアドバイス
- ・子供の追究に対する称賛・価値付け・進捗の確認

山岸教諭は、子供一人一人に自立的な学びを促しつつも、全ての子供に質の高い学びを実現するには、教師の的確な助言が必要と言います。「子供だけでできないことは教師の仕事。」教師の存在は決して軽くなったわけではなく、個々の子供の学習状況や個性にも応じた適切な指導・支援を行うといった、専門職としての高度な力量が求められると言えるでしょう。



子供の学習状況に応じて支援する山岸教諭

５．学校全体で取り組むポイント～鈴木教頭・山岸教諭インタビューより～

「教科によっては教師による講義型だった授業が、今では子供が主体的に学びを進める授業へと変わってきています。」吉田中学校の先生方は、授業改善に手ごたえを感じているようです。

大きな原動力となっているのが、令和４年度からスタートした前述の町全教職員研修会です。吉田町の小・中学校４校が年間１回ずつ全クラスの授業を公開し、公開校以外の全教職員が参観・協議することで授業について具体的に学び合います。一つの中学校区で同じ方向に向かって授業づくりの研修ができることは、子供にとっても教師にとっても大きな意味があるといいます。吉田町では、これら４校の全教職員チャットが開設され、授業づくりに関する様々な情報共有とネットワークづくりが日常的に行われています。この横のつながりが「試してみよう」という前向きな空気を生み、次第に各学校全体へと広がっていきました。

吉田中学校でも校内チャットが活用され、様々な情報が共有されます。特に、授業で使用する単元計画やワークシート、振り返りシートなどの様式データは教師間で常に共有され、適宜アレンジして活用しています。教師が互いの取組や教材等の成果物を日常的に共有するオープンシェアの仕組みが、中学校においても教科の枠を超えた授業づくりを進める協働的な風土を育んでいます。

6. 終わりに

吉田中学校では、「生徒の主体的な学び」の実現に向けて、子供の選択肢を増やして子供が自らの学びをカスタマイズできるような授業設計を行っていました。その一方で、教師が教科指導の専門性に基づき、個々の子供の学びに寄り添いながら適切にフィードバックすることも大切にされていました。また、町ぐるみの研修体制の中で、校内のみならず、学区の小学校とも授業づくりについての情報共有を図り、意欲的に授業改善に取り組んでいました。

本記事が、全国の多くの先生方にとって、それぞれの専門性を発揮しながら、子供たちが「自分らしい学び」を実現する授業へと改善していくヒントになってほしいと願っています。

実践編⑥

ICTを活用した探究的な学びと
豊かな協働で生徒の学びを深める！
宮城県仙台第三高等学校の挑戦

「生徒が自分たちで考え、 探究する授業」づくり

【実践編⑥】「生徒が自分たちで考え、探究する授業」づくり

～ICTを活用した探究的な学びと豊かな協働で生徒の学びを深める！

宮城県仙台第三高等学校の挑戦～

宮城県仙台第三高等学校は、平成 22 年度から文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業の指定校として理数教育の充実に取り組んでいます。また、令和 5 年度にはリーディング DX スクール指定校となり、ICT を活用した授業・校務改善にも力を入れています。さらに、授業の成果を SSH ならではの科学的な探究活動に生かすことを目指し、プロジェクト型の学習（PBL）を取り入れた教科融合科目の開発を進めるなど、多角的・総合的に新たな学びづくりに取り組んでいます。

本記事では、2 つの授業を取り上げ、ICT を有効に活用しながら生徒の協働を大切にした単元づくりにより、全ての生徒に資質・能力の確かな育成を図る挑戦に迫ります。

1. 取組のポイントと経緯～時間をかけて進化させてきた授業づくり～

（1）教科を超えて、目指す授業を共有

仙台第三高等学校では、コロナ禍を契機に、「学校でしかできない学びとは何か」を教職員間で議論しながら「生徒が自分たちで考え、探究する授業」に向けて改善を図ってきたといいます。具体的には、教師が講義する時間をできる限り短くすること。そして、学習課題や問い、学びの進め方等を一定程度、個々の生徒の選択に委ねつつも、学びを深めるために生徒同士の多様な協働も大切にしたい単元構成となるよう工夫することです。

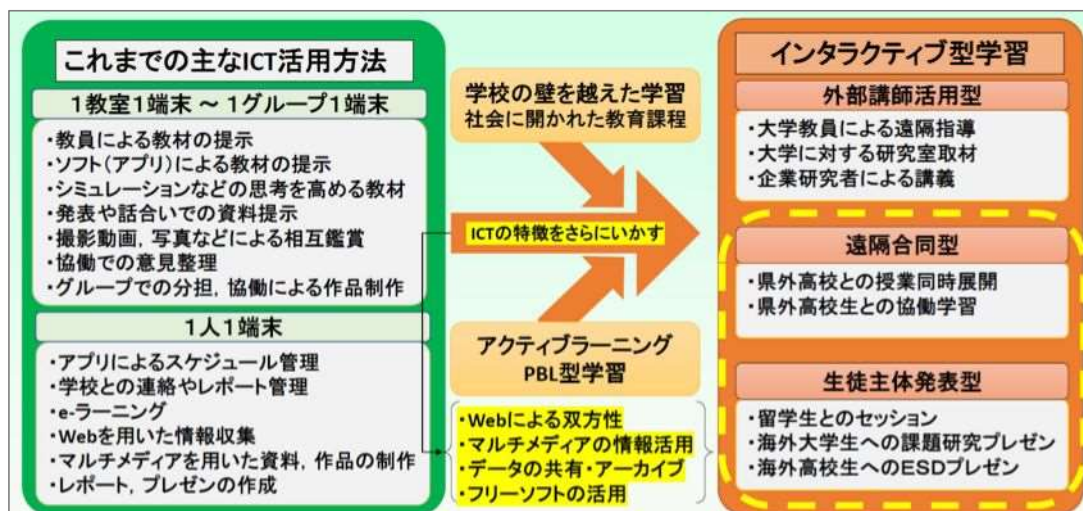
こうした大きな方向性を全教職員で共有し、年間を通じて職員研修を計画的に実施し、授業改善へのモチベーションを高めて取り組んできました。

（2）ICT 活用による授業づくりの促進

仙台第三高等学校では、現在、学校が推奨した端末を生徒が学校に持参する BYAD（Bring Your Assigned Device）方式により、ICT の活用を推進しています。「生徒が考え、探究する授業」でも、生徒同士の関わりの中で個々の考えを広げ深めていく学びを実現する上で、1 人 1 台端末とクラウド環境が

大きな役割を果たしています。

クラウドの活用により、情報交換のスピードが圧倒的に速くなったことが授業改善を加速させたといえます。生徒個々の多様な方法での学習の記録、互いの学習状況の参照と活用、複数の生徒による協働的な意見交換や協議内容の整理、作品の共同制作や分担作業など、ICT 活用の充実に伴って、生徒の学習活動も大幅に充実したといえます。また、学校の壁を越えて外部関係者と遠隔でつながる「インタラクティブ型学習」の実践も取り入れています。



仙台第三高等学校における ICT の活用方法

2. 単元づくりのポイント～生徒が考え、探究する学びのデザイン～

仙台第三高等学校の授業づくり・単元づくりでは、教科・科目等の特性によって様々な工夫がなされていますが、共通に意識されているのは主に以下のポイントです。

- ① 学習指導要領や様々な資料を基に、目の前の全ての生徒に育みたい資質・能力を具体的に定める。
- ② 育みたい資質・能力の育成につながるパフォーマンス課題を単元終盤に設定し、その単元における思考・判断・表現の評価場面とする（一方で、知識・技能の評価は定期考査も活用）。
- ③ 単元の学習計画や評価基準を作成し、生徒が目標と見通しをもって学習を進めることができるよう、単元のはじめに生徒に共有する。
- ④ 資質・能力がよりよく育まれるよう、生徒が協働的に学ぶ学習活動を意図的に組織する。
- ⑤ 教科・科目等や学習内容に応じた ICT の活用を意識する。生徒が学習に I C T を有効活用できる環境を整え、教材等を準備する。

取材したのは、第2学年の「公民（公共）」と「英語（Research Expression II）」の授業です。それぞれの授業は以下のような構想のもとで実践されました。

（１）第２学年公民（公共）「財政の役割と社会保障」（片平教諭）

この単元の学習内容について、学習指導要領では次のように示されています。

ア（ウ）職業選択、雇用と労働問題、財政及び租税の役割、少子高齢社会における社会保障の充実・安定化、市場経済の機能と限界、金融の働き、経済のグローバル化と相互依存関係の深まり（国際社会における貧困や格差の問題を含む。）などに関わる現実社会の事柄や課題を基に、公正かつ自由な経済活動を行うことを通して資源の効率的な配分が図られること、市場経済システムを機能させたり国民福祉の向上に寄与したりする役割を政府などが担っていること及びより活発な経済活動と個人の尊重を共に成り立たせることが必要であることについて理解すること。

（イ）現実社会の諸課題に関わる諸資料から、自立した主体として活動するために必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取り、まとめる技能を身に付けること。

イ（ア）アの（ア）から（ウ）までの事項について、法、政治及び経済などの側面を関連させ、自立した主体として解決が求められる具体的な主題を設定し、合意形成や社会参画を視野に入れながら、その主題の解決に向けて事実を基に協働して考察したり構想したりしたことを、論拠をもって表現すること。

片平教諭は、「政府の経済的役割と租税の意義」について扱う中で日本の財政上の課題に関する問いを自ら立て、事実を基に多面的・多角的に考察し公正に判断する力や、課題解決に向けて構想したことをグループで議論する力を高めたいと考え、次のように単元を構想しました。

- ・日本の財政制度や課題（財政の目的、財政のしくみ、租税の意義と課題、公債発行と財政赤字など）について、外部機関による出前授業も含め、教師が設定した学習課題（問い）を中心に追究（３時間）
- ・日本の財政制度や課題について、理解が足りない点、疑問に思った点を視点にして、生徒一人一人が新たな学習課題（問い）を立てて追究し、追究した内容を基にグループでディスカッション（１時間）

特に単元の終末のグループディスカッションは、単元や学習のまとめりと共に継続的に行うことで、資質・能力の確実な育成を図っています。

時間	活動概要
1	「政府の経済的役割と租税の意義」授業 ・財政の目的や機能、予算制度、税体系と税の種類、わが国の財政上の課題等について、教科書・資料集を基に問題について考え解答。 ・グループで問題に対する解答について討議し、教員から解答解説。
2・3	外部機関による出前授業（東北財務局および仙台北税務署） ・税の徴収や予算編成のシミュレーションをテーマに講義とグループワーク。
4	問いづくり活動 ・前時までの内容を振り返り、興味をもった点や不明点について自分なりに追究したい問いを設定し、その視点や見通しを共有。 ・自分で立てた問いに対して追究を進めた後、それぞれが追究した内容についてグループでディスカッション。

評価の計画		
評価の観点…5項目がスプレッドシートに十分に記述されているか ①問 題：学習した単元や内容に関連して、不明点や疑問点が適切に表現されている ②背 景：問いを立てた契機や着眼点がわかりやすく示されている ③仮 説：問いに対して自分なりの仮説が、文章の形で表現されている ④考 察：問いに対する見通しについて複数の観点から述べられている ⑤参考文献：参照した情報が明示されている		
〈A 評価〉 5項目が十分に記述されているなど、自らの課題を追究することを通じて、本単元の理解や学習の見通し・振り返りが十分にできている。	〈B 評価〉 5項目のうち一部を記述していない・不十分であるなど、自らの課題を追究することを通じて、本単元の理解や学習の見通し・振り返りが部分的にできている。	〈C 評価〉 5項目について不十分な記述が多いなど、自らの課題を追究することを通じて、本単元の理解や学習の見通し・振り返りができていないもの(未提出含む)。

公共「政府の経済的役割と租税の意義」単元計画

(2) 第2学年英語 (Research Expression II) 「探究についてセッションしよう」(山崎教諭)

「Research Expression II」とは、SSH 指定に伴い設けられた学校設定科目で、理数科の「課題研究」で探究したことを題材にして英語表現を学びます。英語による論理構成能力、プレゼンテーション能力、即興的なコミュニケーション能力を育成することをねらいとしています。

アウトプットの舞台としては、校内における探究学習の成果発表会「イノベーションフェスタ」と、台湾師範大学附属高級中学の生徒との研究発表会が設定されています。こうした目標に向けて、生徒は自分たちの探究内容のプレゼン準備を進めるとともに、東北大学の留学生からアドバイスをもらうセッションを複数回(令和6年度は8回)実施します。単元の終末にはパフォーマンステストを行い、資質・能力の総括的な評価を行います。

Session	Date	Contents
1 st	6/29 (水)	・GLCTA(Teaching Assistant)との顔合わせ ・課題研究班の研究内容の紹介
2 nd	7/10 (水)	・研究スライドの説明・添削 ・GLCTA からの改善に向けたアドバイス
3 rd	10/9 (水)	・前回からの修正部分の確認 ・口頭発表原稿の添削 ・GLCTA からの改善に向けたアドバイス
4 th	10/30 (水)	・イノベーションフェスタのリハーサル・最終確認
5 th	11/7 (水)	・イノベーションフェスタ
6 th	11/13 (水)	・イノベーションフェスタで得たフィードバックの共有・修正内容の確認
7 th	12/4 (水)	・台湾セッション前最後のリハーサル
8 th	1/15 (水)	・お別れセッション

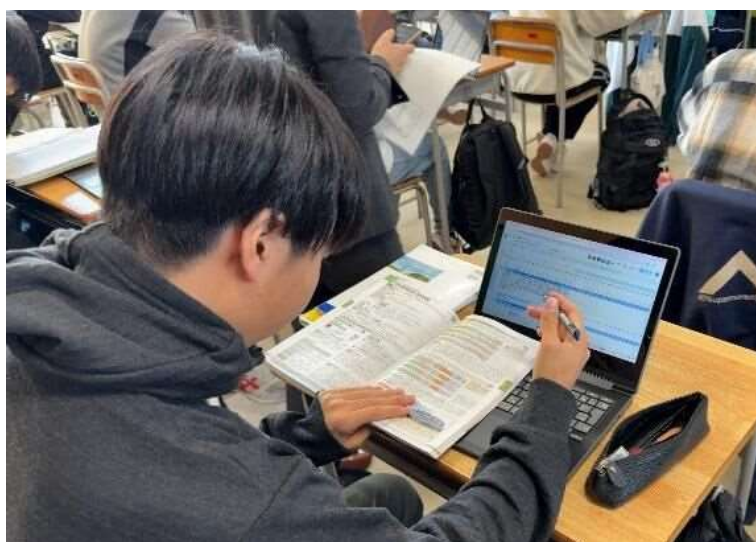
令和6年度 Research Expression II におけるセッションの年間スケジュール

3. 実際の授業のワンシーン～仲間との協働で学びを深める生徒～

(1) 第2学年公民（公共）「財政の役割と社会保障」（片平教諭）

「政府の経済的役割と租税の意義」について扱う単元の最終回。片平教諭は、それまでの学習を簡単に振り返った上で、生徒たちに「わからなかったところ、疑問に思ったところなどに着目して、自分なりにさらに追究したい問いを立ててみましょう。」と投げ掛けました。

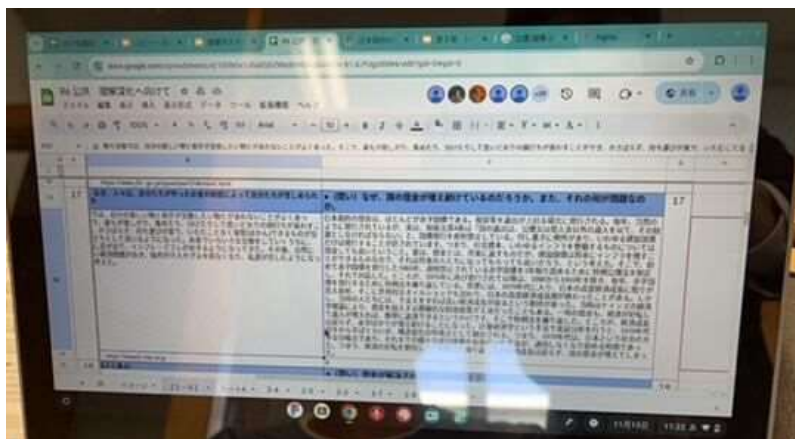
生徒は、教科書や前時までの学習を記録した資料を見ながら、個々の理解度、興味・関心に応じて自分なりの問いを立て、端末内の共有シートに記述していきます。日本の財政状況について理解を深めたいと考えた生徒は、「なぜ、国の借金が増え続けているのだろうか。また、その何が問題なのか。」という問いを立てました。財政における所得再配分の機能である累進課税制度について疑問を抱いていた生徒は、「所得税率の境目によって所得の高い人の方が実際の収入が少なくなるようなことはないのか」という問いを立てました。世界のユニークな税制度、社会保障と税の関係など、生徒から様々な内容の問いが生まれます。



自分の問いを立てて追究する子供

全員が自分なりの問いを立てられたところで、片平教諭は、近くの生徒同士でそれぞれの問いを紹介するよう促します。スプレッドシート上でも誰がどのような問いを立てたかがわかるようになっていましたが、敢えてなぜそのような問いを立てたかを伝え合わせることで、生徒はそれぞれの問題意識を深く理解し、刺激を与え合っていました。

その後、生徒は自分の立てた問いについての追究に移ります。教科書、資料集、端末の検索機能を使って情報を集め、それらを基に考えます。同じような問いを立てた友達と相談しながら、問いに対する答えをまとめる生徒もいます。日本の財政状況について問いを立てた生徒は、日本の財政悪化の原因とそれが引き起こす問題について詳細にまとめ、改めて基礎的財政収支（プライマリー・バランス）の重要性に気がきました。累進課税制度について問いを立てた生徒は、所得と税率を仮定して実際の収入を計算しながら、公正な租税制度の在り方について考えていました。問いに対する答えも、スプレッドシート上に記録され、他者参照できるようになっていました。



生徒一人一人の問いと答えはクラウド上で記録・共有

授業の後半は、生徒一人一人が立てた問いと答えについてグループでディスカッションする時間です。説明する生徒は、自分の問いに対して、どのような資料からどのように判断し、どのような答えをまとめたのかを伝えます。聞き手の生徒は説明を受け、質問したり自分なりの意見を述べたりして、互いの理解を深めていました。生徒全員の問いについてのディスカッションが続き、最後に学習の振り返りを記述して小単元の学習を終えました。



それぞれの問いについてグループでディスカッションする生徒たち

(2) 第2学年英語 (Research Expression II) 「探究について (東北大学 GLC 連携授業)」 (山崎教諭)

本時に至るまで、生徒たちは「課題研究」で探究してきたそれぞれのグループの研究課題について、アカデミックなプレゼンテーションの内容を検討し、準備してきました。翌月に控えた台湾師範大学附属高級中学の生徒との対面セッションで実際に英語による研究発表を行います。その準備段階で、東北大学の留学生サポーターとオンラインでつながり、フィードバックをもらうセッションを行います。この日のセッションは、直前に終了していたイノベーションフェスタ（校内における探究学習の成果発表会）での発表を振り返り、留学生からの助言をもらって今後の課題や改善策を探る内容です。生徒は「課題研究」のグループごとに分かれ、基本的に教師の助けは借りずに英語だけで40分間のセッションを行うという高度な活動に取り組んでいました。

はじめに、生徒たちはイノベーションフェスタに参加してくれた留学生に、グループ発表の振り返りを伝えます。伝えるおおよその内容はあらかじめ端末内の記録シート等に用意されており、生徒たちは発表に対する自己評価をスムーズに留学生に伝えていました。



グループごとに留学生サポーターとセッションする生徒たち

ここからが本格的なセッションです。生徒たちからの振り返りを受けて、留学生サポーターから様々な質問やアドバイスが返されます。「課題研究」における探究内容に関わる質問から、発表の構成や表現方法への助言など、多岐にわたります。生徒たちは、留学生からの質問やアドバイスの内容を聞き取り、理解し、応答することを繰り返します。まさに、セッション。即興によるコミュニケーションが続きます。

質問やアドバイスの内容がすぐに聞き取れない場合は、単語の意味を調べて留学生が伝える内容を推測したりグループのメンバーで確認したりしていました。また、質問やアドバイスに対して自分たちの考えを述べる際は、グループメンバー同士の協力が必要です。生徒たちは自分たちの伝えたいことを英語でどう表現すればよいか、活発にやり取りしながら考えます。端末もフル活用しています。探究内容やそれにかかわる英語表現については PC、タブレット、スマートフォンといった複数の端末を駆使しながら必要な情報や英語表現を調べてセッションに活かしていました。



複数の端末をセッションで活用

生徒たちは留学生と英語でのやり取りを続けながら、質問やアドバイスの内容をホワイトボードに可視化したり、ノートやワークシートにメモしたりしていました。そして、その内容を基に、翌月の台湾師範大学附属高級中学の生徒との対面セッションに向けて、今後の自分のたちのグループの発表をどのように改善していくか話し合っていました。



セッションの内容をグループや個人で記録

高度で即興的なコミュニケーションが求められるセッションでしたが、自分たちが時間をかけて探究してきた課題だからこそ、真剣に向き合い、自分たちの言葉で考えを伝えることができていました。長時間にわたる留学生とのセッションを All English でやり遂げ、この日の Research Expression II の授業が終わりました。翌月にはいよいよ、台湾での大舞台がやってきます。

※授業ハイライト動画（「note」に掲載）

4. 授業づくりのポイント～片平教諭・山崎教諭の授業&インタビューより～

片平教諭の公共の授業、山崎教諭の Research Expression II の授業は、いずれも生徒たちが豊かに関わり合いながら一人一人の学びを深めていました。異なる教科に共通するポイントはあるのでしょうか。授業の様子や授業後のインタビューから探ります。

（１）個々の学びを深める協働の場を位置付けた単元構成

両教諭は、生徒一人一人（又は小グループ）が個別の興味・関心に応じて学習を行える場面を設けつつも、協働の場を意図的に位置付けることが学びを深めるために不可欠だといいます。

片平教諭は、公共を含めて公民の授業は、「螺旋状で発展的に学習が展開できる特徴がある」と言います。その一環として、単元の節目（単元の終末）にそれまでの学習を踏まえて生徒一人一人がさらに学びたい内容を考え、自分なりの問いを立て、個々の追究を生徒同士でディスカッションする活動を設けています。一人一人の問いは様々ですが、いずれも深く相互に関連しています。ディスカッションを通じて生徒は多くの情報を関連付け、多面的・多角的に考察し判断しながら議論する力を高める単元構成となっています。

山崎教諭が行った Research Expression II の授業は、イノベーションフェスタでの発表、台湾の生徒に対する発表が文字通り大きな舞台となっていますが、発表に至る過程で東北大学の留学生からフィードバックをもらう機会が学びを深める重要な場となっています。「自分たちで決めたテーマや視点でやり取りするからこそ、自然と英語力が伸びていくんです」という山崎教諭の言葉が印象的です。2回の大きな発表に向けて「課題研究」の内容を英語でよりよく伝えることを目指し、生徒はグループのメンバーの力を結集しながら留学生と即興的に英語でセッションを行います。年間8回のセッションを通して、論理構成や英語表現についての学びを深める単元構成となっているのです。

（２）学習目標と評価基準の生徒への共有

仙台第三高等学校で重視しているのが、単元における学習計画、目標と評価基準を生徒に示すことです。

公共の授業では、単元全体や小単元ごとの目標をワークシート等で生徒に示します。また、単元の終末に学習のまとめとしてパフォーマンス課題を設定する際には、内容やまとめ方を評価する基準を示したルーブリックを生徒に共有しているそうです。

Research Expression IIの授業でも、「言語材料を用いて、論理構成や展開を工夫して話したり書いたりして伝える」ことが単元全体の目標であることを生徒に伝えていきます。また、留学生と行うセッションは主体的に学習に取り組む態度を重視していますが、ここでもセッションごとに目標と評価基準を明確に示しています。研究発表会後にはパフォーマンステストの場が設けられ、単元目標に照らした評価基準（ルーブリック）が設定されてあらかじめ生徒と共有されています。山崎教諭は、「適切な評価を取り入れた学習活動は、生徒がレベルアップを実感するためのステップです」と語ります。また、こうした目標と評価基準の生徒への共有は、生徒同士の相互評価にも役立ち、協働的な学びを充実させる要素にもなります。

	A	B	C
知識・技能	研究目的・研究対象の説明・問いor仮説・今後の見通しを全て順序立てて分かりやすく発表している。	研究目的・研究対象の説明・問いor仮説・今後の見通しを入れているが、聞き手を意識した発表ができていない。	研究目的・研究対象の説明・問いor仮説・今後の見通しのいずれかが不足しており、発表内容が不十分である。
思・判・表	質問に対して分かりやすく答えることができる。	質問に答えているが、やや分かりにくい。	質問を理解した答えになっていない。
主体性	発表において、聞き手の視点に立って工夫を凝らしながら懸命に発信しようとしている。	発表において、聞き手の視点に立った発表をしようとしているが、不十分である。	発表において、聞き手の視点に立って発表をしていない。

単元終末のパフォーマンステストの評価基準（ループリック）


[Google Site](#)

SSH×GLC Zoom session : Nov. 13th


[Zoom Link](#)

MUST READ BEFORE EACH SESSION

① セッション前日まで
チームで、各分組の進捗状況を共有しておく。

② セッション中
サポーターからのフィードバックをいただいた質問をメモ欄に記入しておく。

③ セッション後～その週の金曜日

STEP 1 : 各自 TMP にて進捗の追いつけを行う。

Teamwork : 組ごとのよう進捗を質疑し合う。特に難が壁でついていた。

Management : セッション日から逆算し、どのようなことを計画的に準備・分
担・練習したいか。

Passion : 研究内容の面白さを分りやすく伝ええる熱意はあったか。

STEP 2 : STEP 1 と、セッション中のメモやサポーターからの指摘・質問を踏
まえ、次回のセッションのチームメンバーの目標、次回のセッションまでに
すべきことを各組が取りまとめる。

Time	Menu	Details
All Together Session		
13:00~13:20(20min)	① Specific students get checked in the main and set up for Zoom session.	
13:20~13:25 (5min)	① Opening remarks	
Group Session		
5 th period 13:25~14:10 (45min) (Break)	② Reflection on Innovation Fests ③ Sharing remaining tasks	The main purpose is to let GLC supporters know how the association feels now. Students further mention their remaining tasks to be done by the next session on December 4 th (final rehearsal before Taiwan).
14:10~14:20 (10min)	The whole session will be conducted by students.	
6 th period 14:20~15:05 (45min)		
All Together Session		
15:05~15:10 (5min)	① Closing remarks	Announcement for the next session

❗ 注意事項！

Reflection はより具体的に何が良く、何が不足して、次回をすべきで、何を思っ
たのかを明確に記載すること。下記の通り、「主体的な態度」で評価する。

Grades	主体的な態度・学びを調整する力
5	Teamwork・Management・Passion の観点から、セッションの前・中・後を振り返り、次のセッションでレベルアップしようとしている。また、「発表で工夫した点」や「新たに身につけた表現」も記載してある。
3	Teamwork・Management・Passion の観点から、セッションの前・中・後を振り返っているが、次のセッションの共通点や十分である。「発表で工夫した点」や「新たに身につけた表現」の記載が十分である。
1	Teamwork・Management・Passion の観点から、セッションの前・中・後を振り返っておらず、次のセッションの共通点の無い、「発表で工夫した点」や「新たに身につけた表現」の記載が無い。

2

Supporter's Name	Attendance Yes/No (initials)	P ¹ period	P ² period	Name	Score Teachers 5th period 6th period
	○	Team 1	Team 18	1 (1) 1 (1)	
	○		Team 10	2 (1)	
	○	Team 10	Team 18		
	○	Team 12	2 (1)	1 (1) 1 (1)	
	○	Team 16	Team 17	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 2	Team 11	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 3	Team 18	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 4	Team 5	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 5	Team 7	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 6	Team 14	1 (1) 1 (1)	
	○				
	○	Team 9	Team 12	1 (1) 1 (1)	

セッションの進め方・目標（身に付けたい資質・能力）、本時の学習シート

（３）ICT ツールの日常的活用と発展的活用

公共や Research Expression II の授業では、紙の資料も併用しつつ、ICT の活用、とりわけクラウド環境の活用が生徒の学びに欠かせない要素になっていました。主な活用は次のとおりです。

- ・Google Classroom で学習計画や学習の助けとなる様々な資料を配付し、生徒が自分の端末で必要な資料にいつでもアクセスできるようになっていました。
- ・スプレッドシートで学習シートや振り返りシートを一括管理し、生徒は自分の学びを蓄積して振り返ったり、互いの学習状況を参照しながら自分の学びに生かしたりすることができるようになっていました。
- ・生徒たちは、BYAD で持ち込んだ自身の端末に加えて、個人所有のスマートフォンも授業内外で活用することが許されており、必要なタイミングで必要な端末を選んで効果的に活用していました。

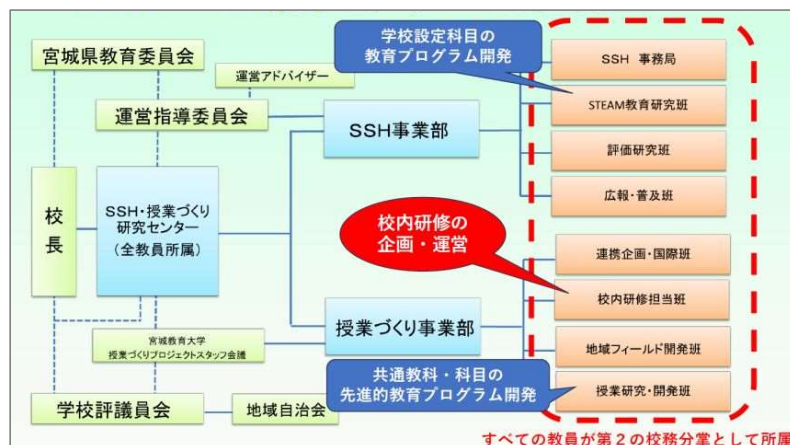
このようなデジタル環境を通じて、生徒はインプットとアウトプットを繰り返しながら、自分なりに考え探究的に学びを進めることができています。

講義をただ聴いているだけの時間はほとんどなく、単元を通じて生徒たちが主体的に学ぶ必要のある課題が散りばめられているため、スマートフォンをゲームや遊びに使ってしまうといった端末の学習外利用は特に問題とはなっていないといえます。

これに加えて、Research Expression II の授業では、ウェブ会議システムを使って東北大学の留学生とのオンラインセッションを行っていました。リアルタイムでの英語によるコミュニケーションは、社会とつながりリアルな学びを実現していると言えます。仙台第三高等学校では、このような外部関係者とつながる学習を「インタラクティブ型学習」と呼んでいます。外部関係者との双方向のやりとりは、それ自体が生徒にとって対話的な学びであるとともに、目的意識をもった対話が生徒の探究的な学びを促進しています。

５．学校全体で取り組むポイント～石川校長インタビューより～

「生徒と教職員がともに進化する『学習する組織』『学習する学校』を目指す」これは、仙台第三高等学校に受け継がれてきた学校経営方針です。仙台第三高等学校の授業づくりの取組は、まさにこの方針を体現しています。具体的には、「SSH(スーパーサイエンスハイスクール)・JD（授業づくり）センター」を組織し、SSH 事業部・授業づくり事業部に授業改善やカリキュラム・マネジメント等に関する 8 つの班を編成し、全ての教師が第 2 の校務分掌として所属する体制をつくっています。教師一人一人が当事者となって、校内一丸となって授業改善を進めています。



仙台第三高等学校の授業づくりの組織体制

また、定期的な会議時間を短縮し、短時間の教員研修「ちょこ研」の時間に充てる取組を行っています。「ちょこ研」では、育成を図る資質・能力、探究的な学びの手法、ICT 機器の活用法、ルーブリックのつくり方などを学び合います。新任教師や異動してきた教師にとっても、こうした場が「三高の授業づくり」を理解する助けになっているそうです。

教師の授業づくりに対する当事者意識と協働的な学びが、生徒の豊かな学びを育んでいます。

6. 終わりに

仙台第三高等学校では、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業やリーディング DX スクールの指定を契機にしながら、生徒の協働を生む単元構成、それを支えるルーブリックや ICT の活用等を重点に、「生徒が考え、探究する授業」を実現していました。教科等を超えて全教員が一丸となって授業づくりに向かうことができるよう、組織体制を整えていることも大きな要素です。

本記事が、全国の多くの先生方にとって、これまで以上に授業づくりの当事者意識をもち、子供たちが豊かに協働しながら資質・能力を身に付けていく授業へと改善するヒントになってほしいと願っています。

（第3回教育課程企画特別部会での発表資料）

https://www.mext.go.jp/content/20250228-mext_kyoiku01-000040050_06.pdf